

秋田の風

日銀秋田支店長コラム

「秋田にはなにもない」。幾度となく聞いたフレーズだ。特に、若者が県外に出たまま戻って来ないといった話になった際に、聞くことが多い。本当に、なにもないのであるか。

全国に支店網を持つ金融機関によれば、ここ数年、創業関連融資の実行件数が大幅に増えているそうだ。昨年の全国における創業融資の実行件数が前年比1割増だったのに対して、秋田は6割増で、東北では一番増加したという。今年に入ってから、昨年を更に大きく上回るペースで増えているそうだ。県内に本店がある金融機関からも、「最近、創業関連の融資や出資を実行した」「支援体制を強化した」といった話を頻繁に聞く。

創業の増加

こうした動きに関し、県も起業支援などの補助金の充実に加え、先日にはAKISTA（アキスタ）を立ち上げ、起業家同士や支援団体をつなげる活動などを本格化させている。

創業の自身をみると、県内外の若者が、これまで秋田の課題とされてきた高齢化の進展や一次産業の担い手不足、街の過疎化によるサービス提供者の不在

は、規模はまだ小さいものの、新たな市場を開拓して短期間で業容を拡大しているところもある。

そうした最近創業した、あるいは若くして経営を引き継ぎ事業を發展させている若手経営者からは、「秋田には可能性しかない」と聞く。秋田には「ビジネスの種となる課題が山積し、都会と比べて競合者は少なく、土

の経営者などが、創業した若手経営者の考えを尊重しながら、個人的に支援をしたり相談に乗ったりしているケースが多いことだ。中世ヨーロッパで芸術・文化が花咲いたのには、芸術家を支援し、後ろ盾となるパトロンが存在が大きかったとされる。やや大げさかもしれないが、今秋田で起きていることはそうした歴史をも想起させる。

アップに関する調査では、スタートアップの出口の選択肢を多様化し、貴重な担い手や資金を循環させる視点が重要との指摘もある。

「自分もやらねがら、おめもやめれ」ではなく、そうした県内外の若者などによるチャレンジを前向きに捉え、県民それぞれができる形で継続的に支援していく姿勢が秋田の将来にとって大切な。

「なにもない」幻想では

といった点に着目して、事業を展開・拡大するケースがみられる。また、そうした企業の中に



地は安くてたくさんある。さらに価値観が多様化する時代、正当な価値がまだ見いだされていない何かがある（ような直感が働く）、といったことのように。人手不足には、都会の専門性のある人材に手伝わってもらう方法もある。

筆者がもう一つ特徴的だと感じるのは、金融機関や行政による支援に加え、県内の先輩企業

いずれにせよ、さまざまな社会課題の深刻化と同時に生じ始めた創業の増加は、非常に面白い動きである。中小企業庁の調査では、起業後5年以内の企業の生存確率は8割程度とされており、先行き失敗するケースも出てくるだろう。失敗を非難することより、再チャレンジできる環境を整備することの方がはるかに大切だ。また、スタート

秋田が若手経営者にとってチャレンジしやすいフィールドであり、金融機関や行政による手厚い支援に加え、県民からも温かく迎えられようという認識が広がれば、若者は自ずと戻ってくるだろう。「秋田にはなにもない」は、若者を送り出した周囲が描いた幻想ではなからうか。

〈随時掲載〉

片桐大地・日本銀行秋田支店長